

## 徒然草 第七十四段

蟻のごとくに集まりて、東西に急ぎ南北に走(わし)る。

高さあり賤しきあり。老いたるあり若きあり。行く所あり帰る家あり。

夕(ゆうべ)に寝(い)ねて朝(あした)に起く。営む所何事ぞや。

生(しょう)を貪り、利を求めてやむ時なし。身を養ひて何事をか待つ。

期(ご)する所、ただ老と死とにあり。

その来(きた)る事 速(すみ)やかにして、念々の間にとどまらず、是を待つ間、何の楽しみかあらん。

まどへる者はこれを恐れず。名利におぼれて先途(せんど)の近き事を顧みねばなり。

愚かなる人は、またこれを悲しむ。常住ならんことを思ひて、変化(へんげ)の理(ことわり)を知らねばなり。

■営む所=生の営み。 ■生を貪り=長寿をむやみに願う。 ■期する所=期待する。あてにする所。 ■念々=時々刻々。刹那刹那。 ■先途=到着点。死。 ■常住=常にそのままのこと。不死。 ■変化の理=万物はうつりかわり一定の状態にとどまらないという道理。無常。

【訳】蟻のように集まって東西に急ぎ南北に走る。身分の高い者あり賤しい者あり。老いたるあり若きあり。行く所あり帰る家あり。夜寝て朝起きる。人の営みはいったい何なのだろう。やたらに長寿を願い、利益を求めてやまない。身を養って何事待つというのか。頼む所は、ただ老と死とにある。それは速やかにやってくるのであり、時々刻々の間に留まらない。これを待つ間、何の楽しみがあるのか。世俗にまみれている者はこれを恐れない。名利におぼれて終着点たる死の近いことを顧みないからである。愚かな者はまたこれを悲しむ。不死であることを思って、世の中の万物は変化するという物の道理を知らないからである。

○蟻のように群れをなし、西へ東へ猛スピードで、南へ北へ超特急で。社会的身分の高い人もいる。貧しい人もいる。老人もいる。小僧もいる。出勤する場所があつて、帰る家もある。夜に眠くなり、朝に目覚める。この人達は何をしているのだろうか。節操もなく長生きを欲しがり、利益は高利回りだ。もう止まらない。

○養生しながら「何かいいことないか」と、呟きながら果報を待つ。とどの詰まりは、ただ老いて死ぬだけだ。老いて死ぬ瞬間はあつという間で、思いの刹那が留まる事もない。老いて死ぬのを待っている間に何か楽しい事でもあるのだろうか。迷える子羊は老いて死ぬのを恐がらない。名前を売る為に忙しく金儲けに溺れて、命の終点が近い事を知らないのだ。それでいてバカだから死ぬのを悲しむ。この世は何も変わらないと勘違いし、運命の大河に流されているのを感じていないからだ。